

阮光碧——ベトナムの心性と劉永福伝奇(上)

林 正子

はじめに

- 一 マンダリンと匪——漢字文化圏ベトナム
 - 二 マンダリンと匪の師弟——阮光碧の贈詩(以上本号)
 - 三 マンダリンから匪へ——阮光碧(以下次号)
 - 四 匪もマンダリンも越えて——劉永福の唱和
- 小 結

はじめに

二〇〇五年九月、ベトナムのフエ市のファン・サウナム中学校で東遊運動百周年を記念して、潘佩珠(ファン・サウナム)の胸像が除幕された。⁽¹⁾ 日露戦争百周年の今年は、ベトナムから見れば東遊運動の百周年にあたる。日露戦争を契機として、フランス領インドシナ連邦から密出国して日本で学び「救国」を実現すべく

留学生を送り込んだのは、潘佩珠(ファン・ボイチャウ 一八六七—一九四〇)であった。東遊運動は、阮朝の皇族疆楫を盟主に戴き君主制での独立をめざした。しかし、日仏協約の成立で明治政府の協力をとりつけたフランスは、留学生を強制送還させ運動を挫折においこんだ。日本で忘れ去られた潘佩珠と留学生の動向について乏しい資料をたぐるなか、かれらを支えた民間人として浅羽佐喜太郎の存在が明らかにされたのは、一九八〇年代に入ってからであった。⁽²⁾ 東遊運動が失敗した後も潘佩珠は、植民地ベトナムの実情を知らせるために、多くの本を漢文で書いた。その一冊が『越南亡国史』である。

本稿では、潘佩珠が『越南亡国史』のなかで「国亡時志士小伝」⁽³⁾の冒頭に置いた「阮碧」をとりあげて、かれが劉永福(一八三七—一九一七)に与えた影響を検討してみたい。「阮碧」とはタイバツク起義(一八八五—一八九二)を指導した阮光碧(ゲン・ク

アンビツク 一八三二—一八九〇)をさす。かれは阮朝の山西按察使在任中に劉永福と師弟関係をむすんだ。以来、ラオカイ(保勝)を根拠地として黒旗軍を率いる劉永福が清国に強制退去させられるまで交流を保った。ベトナムのマンダリン阮光碧は中国の匪劉永福と師弟となったのである。

阮光碧の残した『漁峰文集』⁽⁴⁾は、従来ベトナムにおける劉永福と黒旗軍にかんする基本資料とされている『劉永福歴史草』(劉永福の口述にもとづく)⁽⁵⁾と『請纓日記』(唐景崧)とを補うベトナム側資料である。そのなかに「遇劉軍門第宅作凡四首」と題して劉永福に贈られた詩がある。第四首の「聞道南溪去步遲 君心不樂我心悲 炎天雨露長銘刻 猶有來人訂會期」は、反フランスの戦いにおける友好の印としてベトナム、中国両国研究者にしばしば引用されてきている。

さらに阮光碧は、劉永福との関係のみでなく『大南寔録正編』にその死が記された点でも注目に値する。『大南寔録』(以下、『寔録』と略記)は、漢字文化圏の前近代における共通性の一つである中国型の史書である。『明実録』をモデルとするとみられるが、ベトナムがフランス支配下に入ると叙述は変化を見せる。⁽⁶⁾曲筆をしいられるなか、興化府落城記事につづけて阮光碧が反フランス運動(勤王運動)に参加して倒れたことを記す。⁽⁷⁾

他方、中国では清仏戦争後の劉永福と黒旗軍が、日清戦争につづく台湾戦役で抗日戦を半年にわたって持ちこたえたことが伝奇

をうんだ。清仏戦争でフランス軍を叩きのめした黒旗軍は、台湾では日本軍を放逐して当然と、中国民衆は思ったのである。上海の『点石齋画報』は、黒旗軍の奇計奇襲のゲリラ戦が日本軍を圧倒しているという劉永福伝奇を発信した。⁽⁸⁾

日本人も劉永福には、清仏戦争期には自由民権運動のなかで親近感をいだいた。⁽⁹⁾しかし、台湾戦役に現れたかれは、福沢諭吉が決めつけたように「清の將軍ではなくただの匪賊」であった。⁽¹⁰⁾劉永福伝奇が生まれる背景として筆者は、前稿ではベトナムでのゲリラ戦体験を重く見た。本稿ではベトナムでかれが獲たものは、近代戦争への対抗としての戦術だけではなく、侵略者に対する抵抗戦の支柱である精神性——心——であったことを明らかにしたい。この「心」こそが核となつて劉永福伝奇を生んだといえよう。以下、マンダリン、劉永福伝奇、『大南寔録』を鍵として、阮光碧が劉永福に贈った詩を中心にベトナムが劉永福に与えた心性の問題を明らかにしてみたい。

一 マンダリンと匪——漢字文化圏ベトナム

潘佩珠の「国亡時志士小伝」の冒頭におかれた阮光碧伝は、次のとおりである。

阮碧 南定人、拳二甲進士。法人取興安、碧為巡撫、櫻城死戦。城陥、棄妻子、入山結義士。北圻全轄義人皆隸麾下、二

年余、屢与法戦。適勤王詔下、遂奉詔如粵、援清兵黃廷経、李子才等、謀復宣諒、与法戦死。碧家南定、去諒山十余日程、法人謂死信詐也、逮捕全家。時碧母已七十矣、幽之坡室（法人獄名）、累年不得解。碧所居程浦社、以碧故、法人幽其豪役、没其産、欲多方凌轢以得碧之出也。一人尽忠、全郷蹂躪、文明之流毒甚矣哉！

阮光碧は、科挙で進士となりマングリンとして阮朝に仕えた。フランス軍が興安府城を陥した時（一八八四年）、妻子を棄て山に入った。義兵を編成して北部ベトナムの義兵をも統括しフランス軍と戦った。二年余りすると咸宜帝の詔をうけ広東に使いした。清国軍黃廷経、李子才等の援助をうけ諒山（ランソン）を奪回しようとした。フランス軍と戦って戦死した。フランス人はかれの死を信じないで全家族、七十歳の母親も容赦せず逮捕し長年拘留した。かれの住まいのあった地の豪役は財産を没収された。潘佩珠は「一人が忠を全うしたため、郷土全部を蹂躪する文明」を糾弾して小伝を結んでいる。

潘佩珠が「文明」フランスの侵略を漢文で糾弾したように、ベトナムは漢字文化圏の一国であった。漢字文化圏とは、東アジアの伝統社会の異同を考える場合につかわれる概念の一つである。その際とりあげられ比較されるのは中国、朝鮮、日本で、ともすれば越南がフランス領となるまで公式文字として漢字を使いつづけてきた事実は、忘れられがちである。

阮光碧は漢字文化圏に特有のマングリンであった⁽¹¹⁾。かれらは漢字を独占することで、権力を確保した。そして中国では郷紳、朝鮮では両班、ベトナムでは文紳とよばれる階層を形成した⁽¹²⁾。阮光碧と劉永福との関係を考えるためには、まず漢字のベトナムにおける位置を明らかにする必要がある。字儒（チュウニョー）とはベトナム語で漢字をさし、漢字の本質を見抜いたベトナム人の鋭い感性を伝えてあまりある。

紀元前二世紀に漢の武帝が南越国を滅ぼして郡県を置き、マングリンが派遣され儒学による教化と支配とが始まった。徴姉妹をはじめとする独立への戦いは一〇世紀頃に実を結んだ。以来、各王朝は漢字を使い漢文が普及した。一三世紀には字喃（チュウノム）という民族文字を生んだが、公式文字として定着することはなかった。字喃は漢字の体系によって作字されたため、習得には漢字の理解が前提とされる。フランス植民地支配は、字儒と字喃との識字率の低さを背景にしてローマ字化されたクオックグー（国語）教育を推進していった⁽¹⁴⁾。漢字が公式文字の地位を失ったことは、マングリンの失権を意味した。科挙は一九〇七年に廃止されて、マングリンは過去の遺物となった。

それではクオックグーにたいして漢字はどのような位置を占めるのだろうか。

漢字漢文とベトナム語との関係を、富田健次氏の説明によって見ていこう。ホーチミンの漢詩の表記を例としているため、阮光

碧の詩を考えるうえで助けともなる。すなわちベトナム統一を實現したホーチミンの漢詩集『獄中日記』（一九六〇年）は、図版に見るように一首毎に、一段目が漢字による原作、二段目以下がクオックグー表記による棒読み（音読）、書き下し（散文）、翻案（演歌）という四種類が併記されている。漢字による原詩は漢文の読める人に。音読は漢字は読めないが漢語の知識が十分ある人に。散文は漢語の韻文では意味のとれない一般大衆に。演歌は「意を十分にくんで、ベトナム語の韻律で再び詩につくり替え」た翻案詩で、これこそが「オリジナル作品とは別に独立した一個の優れた「創作」として、代々語りつがれていくべきもの」である。富田氏は、原作↓棒読み↓書き下し↓翻案という思考の流れに、ベトナム人の精神構造のすべてが凝縮されている、と指摘する¹⁵。ベトナム独自の演歌を生んだものは、歌謡（カーザオ）に「石

獄中日記
 身体在獄中
 精神在獄外
 欲成大業
 精神更
 NGỤC TRUNG NHẬT KÝ
 Thân thể tại ngục trung,
 Tinh thần tại ngục ngoài;
 Dự thành đại sự nghiệp,
 Tinh thần càng yếu đại.
 NHẬT KÝ TRONG TÙ
 Thân thể ở trong nhà lao, tinh thần ở
 ngoài nhà lao. Muốn làm nên sự nghiệp
 lớn, tinh thần lại càng phải cao.
 NHẬT KÝ TRONG TÙ
 Thân thể ở trong lao,
 Tinh thần ở ngoài lao;
 Muốn nên sự nghiệp lớn,
 Tinh thần càng phải cao.

図版（富田健次『ベトナム語
 ——はじめの一步まえ』所収）

碑百年、口碑千年」と歌われる「精神」と「心」を重視する心性である。「石碑百年、口碑千年」は『金雲翹伝』に換骨奪胎して登場する¹⁶。そこにみられるのは、石に功名を刻むことで不朽を誇示する中国とは異なる心性である。

ベトナムでは漢字は国号問題をも紛糾させた。一〇世紀の独立までベトナムは、中国にとって漢字漢文による教化の対象であった。「安南」という唐代の呼称は、その現れである。一方、ベトナムは「大越」を国号として主張した。一一世紀にハノイ（昇龍^{ロンビエン}）を都とした李朝は大越と号したが、冊封体制のなかでの中国との共存を維持した。北京における朝鮮使節との詩の応酬は、ベトナムの文化誇示の好機でもあった¹⁷。一九世紀の阮朝は清朝から越南国王に冊封されたが、国内では「大南国」を称して北国（満州族の清朝）との対抗意識をあらわにしている¹⁸。大南国を自称したのは一八三九年、第二代皇帝明命の時であった。かれは中国型統治を進め、父帝嘉隆の信任したフランス人官僚を逐い、キリスト教を迫害した。一八五〇年代に入ると第四代皇帝嗣徳（位一八四七―一八三）は、フランスの侵略に直面し国土は南から蚕食されていった。

フランスの侵略が激化するなか嗣徳二二（一八六九）年、阮光碧は臨洮府知府としてマンダリンの第一歩を踏みだす。その前年、天地会あるいは太平天国とのかかわりを指摘される劉永福が、ベトナムに移住している。かれは清朝とてまぎれもない匪であり、

同時に阮朝にとつても匪であつた。匪とは、天朝の支配下にあるべき臣民から外れた存在、礼教の教化から離脱した存在である。⁽¹⁹⁾かれらは皇帝の支配、礼教の支配から自由であるため体制打倒の破壊エネルギーとして、監視、逮捕、拘束、処刑されねばならぬ存在であつた。劉永福は、黒旗軍を率いて先住の黄旗軍や少数民族と死闘をくりかえした。宿敵の黄旗軍がフランスと結んだのにたいして、劉永福は阮朝から八品百戸を得て宣光省ラオカイを生活拠点として確保し経営した。阮朝の武官の末端に位置づけられたとはいへ、かれが匪ではなく実権をもつた武官と認められるには紙橋の二回の戦勝を待たねばならない。⁽²⁰⁾三宣正提督への任命は一八八三年であつた。(阮光碧と劉永福の略歴は別表参照)

二 マンダリンと匪の師弟——阮光碧の贈詩

一八七一年、マンダリン阮光碧は匪劉永福の師礼をうけた。⁽²¹⁾以後の一四年間にわたつて劉永福は、ベトナムの心性を阮光碧とおして体得していった。以下、ベトナムの心性とは何かを阮光碧の詩から読み取っていききたい。

阮光碧が別離にあたつて贈つた四首は一組で叙事詩をなす。それは劉永福のベトナム移住からはじまり、阮朝・清朝への両属を果たし、黒旗軍の紙橋における二回の戦勝でベトナムの人心を得ながら保身に失敗し帰国にいたるまでを描いている。

詩の後には次のような説明が付されている。

劉提督名永福、広西人。投来本国、以戦功豊蒙陞擢。初授保勝防禦使。嗣德二十六年殺洋将安業、陞領兵。迨洋人通好、奉派踏平辺匪、陞三宣提督。三十六年安決之戦、斬獲掌水師五圈官並三四圈官諺三千余、陞授正提督義良男。建福元年十月日北兵来援。奉清帝光緒諭旨、準統領水陸全軍欽加記名提督軍門衙。咸宜元年陞都統府事。三月中朝与法人講和、撤師入関、仍調劉軍門回広西住。禁再三陳乞南留不得、怏怏抱恨。而婦至南溪、逗遛三月不進、屢被催促。因委人回保勝、将所居第宅、尽付一火、然後起行。蓋不洋人得居此宅也。公回清帝陞授両広提督(後乞回休養)。詳察原由、則北兵此来、多以功名財貨、与劉提督見忌、頗有陰凶傾軋之意、亦縁劉提督不学不知保身之故也。(句点は筆者)

まず清国広西人・劉永福の官歴が戦功によることを、明らかにする。保勝防禦使からはじまり領兵(一八七三年、紙橋の戦い)、三宣提督(フランス人・辺境の匪賊討伐)、三宣正提督・義良男爵(二八八三年、第二次紙橋の戦い)、統領水陸全軍欽加記名提督(二八八四年、清の官職)、都統府事(二八八五年)と累進した阮朝の官歴は一八八五年の清仏戦争の講和で終わる。ついで清官劉永福にたいする清朝からの広西への移動命令を記す。劉永福は抗命してベトナム残留を請い、南溪に三か月留まった。遷延が許されないとみるや、ラオカイの居宅を焼いて出発した。居宅に火を

別表

西暦	阮光碧	劉永福	備考
1832	誕生(明命13年) 原籍 南定省建昌府直定県 安培総程浦杜一村		
1837		誕生(道光17年) 原籍 広西省鬱林州博白県	
1853		父の劉以来病死(咸豊3年)	1840~42 アヘン戦争 清国の開国 1851~63 太平天国 1856~60 第二次アヘン戦争 フランス、ダナンを砲撃
1858	秀才(嗣徳11年)		
1861	拳人(嗣徳14年)		
1867		商人として宣光省に入る(同治6年)、八品百戸(嗣徳20年)	1862 6月5日 サイゴン条約 南部三省割譲
1869	進士(嗣徳22年) 臨洮府知府		
1871	山西按察使(嗣徳24年)	阮光碧に師礼をとる	
1873		権興化保勝防禦使→副領兵銜・保勝防禦使(嗣徳26年)	12月 紙橋の戦い、黒旗軍、ガルニエを倒す
1874	興化巡撫、劉永福を保挙(嗣徳27年)	権三宣副提督軍務	3月15日 第二次サイゴン条約 南部六省割譲、フランス、ベトナムを保護国化
1875	国子監祭酒教授(嗣徳28年)	雲貴総督岑毓英の保奏による四品頂戴(光緒元年)	
1877	山防正使、礼部尚書協辦大学士 興化巡撫(嗣徳30年)	雲南捐局に捐納による二品遊撃銜(光緒3年)	
1878		墓参のため帰郷(光緒4年)	
1879		三宣副提督(嗣徳32年)	
1881		墓参のため帰郷(光緒7年)	
1883		三宣正提督(嗣徳36年) 8月 懷徳の戦い 9月 丹鳳の戦い 12月 山西の戦い	1882 12月20日 李・ブーレ協定 紅河自由通航 フランス、李・ブーレ協定破棄。議会、トンキン遠征費550万フラン支出承認 5月 第二次紙橋の戦い、リヴィエールを倒す 8月25日 フェ条約(アルマン条約) フランスの保護権、決定
1884	4月12日 興化落城(建福元年)	記名提督賞給花翎(光緒10年)	6月6日 第二次フェ条約(パトノートル条約) 6月23日 バクレの衝突=清仏戦争 8月 フランス、福州艦隊を破る
1885	協統北圻軍務大臣純忠将特賜文 自參贊武自提督(咸宜元年) [遇劉軍門第宅作凡四首] 雲貴総督に咸宣帝の国書を贈る タイバック起義を指導	依博徳巴因魯名号、三代一品封典(光緒11年) 3月 左旭(左育)の戦い 臨洮の戦い 清朝の帰国命令	宣光の戦い 鎮南関の戦い 6月9日 天津条約 勤王運動(文紳蜂起)~1920年代
1886	尊室説と雲南に行く(同慶元年)	閩粵南澳鎮総兵(光緒12年)	
1887		署理碣石鎮総兵(光緒13年)	フランス領インドシナ連邦成立
1890	死去(成泰2年)		
1894		幫辦台湾防務閩粵南澳鎮総兵(光緒20年) 黒旗四營と台南へ上陸	8月1日 日本の宣戦布告=日清戦争
1895		10月19日 厦門に去る(光緒21年)	4月17日 下関条約 台湾割譲 5月25日 台湾民主国宣言~10月19日
1896		博白県で人を集め、ベトナムのゲリラと連絡(光緒22年)	1904~05 日露戦争 東遊運動(~1909前後)
1906		潘佩珠、沢州沙河の劉宅で阮善述に合う(光緒32年)	1907 日仏協約
1912		3月 沢州の劉氏祠堂で越南光復会成立(民国元年) 7月 振華興亜会成立	2月12日 清朝滅亡、中華民国成立
1917		死去(民国6年)	

『漁峰文集』『中法越南交渉档』『清代官員履歴档案全編』『近代日本総合年表 第二版』他

かけた理由は、フランス人に利用させないためであった。最後に清朝・阮朝両者にとつて、劉永福はベトナム保全のために功労者であるにもかかわらず、かれが武官としての官歴を全うできなかつた原因を指摘して終わっている。マンダリンから見れば、それは「学ばず保身を知らないため」であつた。ベトナムに派遣された清軍の多くは功名や財貨を目的として、劉永福を妬み排斥したが、それも「不学」が招いた災いである²²と見る。

清仏戦争前後の劉永福の戦功と昇進とは、別表に見るとおりである。帰国後に両広提督に昇任した事実はない。しかし、阮光碧の文脈では両広提督への任命と辞任とは、劉永福の限界を象徴する。「不学」こそが赫々たる戦功を棒に振らせ、官歴をとざしたのである。これはマンダリンの世界観を示している。ベトナムで阮光碧が生きた官界の現実から学んだ「漢学＝儒学」こそが人生を支える、という視点である。まさに儒学が権力を体現するという点で、阮朝と清朝とは小中華と中華の差こそあれ、大南国であり天朝であるという同質の世界であつたといえよう。

他方、ベトナムの儒学には「君よりも国が重い」という独自性²³もある。劉永福へ贈る詩を賦した時、阮光碧は咸宜帝の国書を雲南総督へ届ける重責をになつていた。フランスは越南国王印を銷鎔し、ベトナムは冊封体制から解放された。フランス領ベトナムから清朝への救援使節となつた時、かれは咸宜帝のマンダリンであると同時に匪でもある両属というかつての劉永福と同じ場に立

つことになつた。

さて四首を、阮光碧が並べた順に見ていこう。

其一

第堂一炬付灰飛
何事南来又北帰
算得功名非易処
付甚過此日斜暉

第堂一炬に付し、灰飛す
何事ぞ、南来しまた北帰す
功名、算え得るは易き処に非ず
甚に付し此れを過ぐる、日斜に暉やく

其二

初来砒玉亦難分
一片忠誠九陞聞
幾次龍編戎捷報
人人伝話黒旗軍

初めて来たるや、砒玉また分ち難し
一片の忠誠、九陞に聞こゆ
幾次ロンビエン、戎の捷報
人々は伝話す、黒旗軍

其三

可憐無学昧持身
鎗劔才高孰比倫
到底雄心終不挫
北帰猶誓殺洋人

憐れむべし無学、身を持するに昧らし
鎗劔の才高く、孰か比倫せん
到底雄心、終に挫せず
北帰するもなお誓う、洋人を殺さんと

其四

聞道南溪去步遲
君心不樂我心悲
炎天雨露長銘刻
猶有来人訂会期

聞くならくナムケーを去るや歩み遅し
君の心樂しまず、我が心悲しむ
炎天、雨露を長く銘刻す
なお来る人ありて、会期を訂す

其三、其四には「心」という語が目立つが、ラオカイで目撃した劉永福居宅の焼け跡に触発されて一気に詠われたもので机上の作品ではない。

第一首。かれの居宅——ラオカイ一八年の経営は灰塵に、清国(北)から大南(南)に移住してあげた功名は無に帰した。落日の焼け跡に重ねて、問われるのはベトナムにおける劉永福の活動の意味である。

第二首。阮朝への忠誠——辺境のタイ族、黄旗軍平定に集約される——をつくし、黒旗軍は存在を公認された。⁽²⁵⁾さらにロンビエン(ハノイ)の紙橋の二回の戦勝は、ベトナムの人々に歓呼された。フランス軍が恐れたのは黒旗軍のみであった。⁽²⁶⁾ここで「黒旗軍」は、口碑に記されるという最高の榮譽をうけた。かれらはベトナムにとって石⁽²⁷⁾匪ではなく玉⁽²⁸⁾友であることを証明した。

第三首。劉永福の無学は、かれのもつ抜群の才、劔(伝統的戦法)のみならず鎗(銃⁽²⁷⁾近代戦)の才能がベトナムで地位を築くの阻んだ。戦略と戦闘技術の第一人者は、無学のために阮朝から放擲された。清官として北帰(帰国)したものの「殺洋人」⁽²⁸⁾フランス撃退を誓う心を失わない。雄心である。

第四首。単独で人口に膾炙しており、中国とベトナムとの友好の証とされてきた。⁽²⁷⁾前詩で「雄心」と描かれた心は、ここでは「君心」となり「我心」と対をなす。そこには師弟関係が前提とされ、結びは「かれは人を派遣して、わたしに再会の日を約束した⁽²⁸⁾」と

なり、阮光碧に対する個人的約束である。もちろん再会の約束は、反フランス戦の継続と完成をさすことからベトナムの人々との約束ともなる。劉永福の約束は、阮光碧が代表するベトナム人の心性に向けられたものである。それは炎天⁽²⁷⁾ベトナムは長く雨露⁽²⁸⁾黒旗軍が反フランスに参加した恵みを記憶する、に対応する。

劉永福の南溪での逡巡と阮光碧への使者派遣は、かれの雄心を伝える。阮光碧は、ベトナムが反フランスにたいするかれの献身を忘れない、と応える。「不楽」と「悲」とは同心である、と宣言する。師弟の再会は将来に約された。再会の時はベトナムがフランスから解放される時、救国が実現する時である。それまで師弟の「心」が楽しむことは無い。「心」は悲傷に閉ざされた。

以上、阮光碧の「遇劉軍門第宅作凡四首」は、劉永福の心意気を中心に置くことでマンダリンとしての視点を越えている。「第堂一炬付灰飛」と詠いだし、ベトナム人を歓呼させた黒旗軍の紙橋の二回の戦勝、反フランスの雄心を堅持する無学の劉永福、ベトナムへの帰還を約束する劉永福で結ばれる。清朝マンダリンとしての劉永福には、両広提督であろうとなかろうと最早行動の自由はあり得ない。マンダリンとして限界を熟知しつつ、阮光碧は「無学の劉永福」を、雄心の一点で自分と同じ心を持つ士として詩に定着した。劉永福の後半生の不屈の戦いの核である「心」は、戦場のベトナムで与えられた。戦いの目的を生活維持から「救国」へと昇華させた触媒が、阮光碧ではなかったか。匪とマンダリン

との心の交流の可能性を証した阮光碧は、柔軟な心——まさにベトナムの心性を持つと言えよう。

注

- (1) 朝日新聞二〇〇五年一月四日。
- (2) 「東遊(ドンズー)運動以後の日本とベトナムの関係——アジアの民族運動との関係において——」(昭和五十六年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告研究代表者岡倉古志郎 一九八二)。
- (3) 越南東南子述(梁啓超撰)『越南亡国史』(中国史学会編『中法戦争』七 一九五五)
- (4) 『漁峰文集』はハノイの漢喃研究院に写本が所蔵されている(番号VHC—01817)。阮光碧とかれの文集については、鳥取県立文書館専門員清水太郎氏から貴重な助言と資料をいただいた。『漁峰文集』による阮光碧の詩と生涯については別稿を予定。
- (5) 『劉永福歴史草』(羅香林輯校 正中書局 一九三七)。
- (6) 拙稿「『大南寔録』の成立過程——道光五旬節慶賀使節を中心として」跡見学園女子大学『フォーラム』一八 二〇〇〇年三月、「『大南寔録』の成立過程(二)——フランス支配下における変質を中心として」『拓殖大学論集』二四一 二〇〇〇年五月、「『大南寔録』の成立過程(三)——阮朝の編纂事業を中心に」『拓殖大学論集』二五〇 二〇〇三年三月を参照。
- (7) 『大南寔録正編第五紀』卷三 二七ab 建福元年三月。
- (8) 劉永福伝奇については、拙稿「『点石齋画報』にみる台湾戦役——劉永福伝奇を中心に」『饗餐』一一二 二〇〇四年九月を参照。
- (9) 後藤均平「黒旗軍情報」「秩父反乱」「日本とアジアの人びと」すく

らむ社 一九八一。

- (10) 福沢諭吉の劉永福にたいする評価は、拙稿「民衆が見た植民地征服戦争・台湾——『風俗画報』と『点石齋画報』を中心に」『史苑』六三 一二 二〇〇三年三月を参照。
- (11) マンダリンとは、ポルトガル語のマンダラ(管理する、指揮する)に由来し、ヨーロッパ人が科挙出身官僚の呼称として用いた(ソ同盟科学アカデミー歴史学研究所編 園部四郎訳『植民地・従属国の歴史』一、三二書房 一九五三。一五八頁)。劉永福とベトナム戦線、台湾戦役のいずれにおいても関わった清のマンダリンとして唐景崧、張之洞については別稿を予定。
- (12) 後藤均平『ベトナム救国抗争史』(新人物往来社 一九七五)は漢代の中国官僚による漢化の激しさを指摘。桃木至朗「ベトナムの『中国化』」(池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社 一九九四)はベトナムが中国に呑み込まれなかったことの重要性を指摘している。
- (13) 魯迅は「門外文談」で、漢字の独占の官僚が権力維持のために不可欠であったことを指摘している(『且介亭雜文』『魯迅撰集』一一 岩波書店 一九六四改定版)。
- (14) 岩月純一「ベトナム意識」の形成と「漢字/漢文」——『南風雜誌』に見る「東南アジア」二四 一九九五。同「近代ベトナムにおける『漢字』の問題」(村田雄二郎、C・ラマール編『漢字圏の近代——こゝとばと国語』東京大学出版会 二〇〇五)。
- (15) 富田健次「ベトナム語——はじめの一步まえ」(株式会社DHC 二〇〇二)六一—六四頁。
- (16) 馮穎傑「浅談『金雲翹伝』的語言芸術」(北京大学東南亜研究所編『東南亜文化研究論文集』経済日報出版社 二〇〇四)。
- (17) 朝鮮使節との詩の応酬については、清水太郎「ベトナム使節と朝鮮

- 使節の中国での邂逅——一八世紀の事例を中心に」『北東アジア文化研究』二二二〇〇〇年一〇月、同(二)——一七九〇年の事例(『同』一四二〇〇一年一〇月、同(三))——一五九七年の事例(『同』一六二〇〇二年一〇月、同(四))——一六世紀以前の事例(『同』一八二〇〇三年一〇月、同(五))——一七世紀の事例(『同』二二二〇〇五年一〇月を参照)。
- (18) 南越国の領域は広東、広西を含んだという歴史的事実のために清朝は承認しなかった。
- (19) J.Chesneau, *Secret Societies in China's Historical Evolution*, J.Chesneau ed., *Popular Movements and Secret Societies in China 1840-1950*, Stanford University Press, California 1972.
- (20) 黒旗軍評価問題は、ベトナム—中国の政治関係と連動している。中国では一九八三年に紙橋の戦い百周年を記念して「中法戦争史学術討論会」が欽州で開かれた。ベトナムでは一九九〇年代に阮朝研究が開始されて、阮朝の位置づけが再検討されている。史料の面ではベトナム、中国ともに『大南寔録』の使用は最近のことである。
- (21) 『漁峰文集』六a。
- (22) 清軍の将官の無能については、廖宗麟「徐延旭和中法北寧之役」『印支研究』一九八四—四 参照。当時の清朝のマンダリンとしてはベトナムに劉永福を清朝側にとりこむために派遣された唐景崧と両広総督張之洞の二人が重要である。
- (23) 孫衍峰「儒家思想在越南的傳播發展與變異」(趙麗明編『漢字傳播與中越文化交流』国際文化出版公司 二〇〇四)には、サイゴン条約が締結されると拳人潘文治が「斬嗣徳之首、剖嗣徳之肝、飲嗣徳之血」というスローガンを掲げて反対に立ちあがり、全国の儒生が共鳴したことが指摘されている。
- (24) ラオカイについては別稿を予定。
- (25) 大沢一雄「越南嗣徳朝対土匪与黒旗軍政策之深討」『横浜商大論集』一二—二 一九七九年三月。大沢氏が黒旗軍を土匪と評価したことへの反論には、呂谷「越南嗣徳朝対土匪与黒旗軍政策之深討」『評介』『印支研究』一九八三—二がある。
- (26) (越) 譚春玲 袁仕倉訳「評価劉永福應主要看其積極方面」『印支研究』一九八三—二。
- (27) Tap San Nghin Cuu Lich Su, Nhung Nhan Dinh Khac Nhau Va Vai Tro Cua Luu Vinh-Phuc Va Quan Co Den. Tap San Nghiem Cuu Lich Su 1962-8.
- (28) 『漁峰文集』の第四首の後に「劉提起行、囑來人向余言、洋賊未平必不久歸」とあり、フランス撃退を目的としてベトナム再訪が阮光碧に對して伝えられたことが明らかである。